

法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(59)

爽やかな季節が巡って
きました。清々しい陽気
に誘われて散歩をすれば
道端には藤に山吹、躑躅
に卯の花といった日本古
来より親しまれた草花が
咲き揃っています。初々
しい新緑を背景に、赤や
黄色、藍がかかった紫色な
どに着飾る姿は、まるで
初夏の訪れを楽しんでい
るかのようです。

時わかず
降れる雪かと
垣根もたわに
咲ける卯の花

（『後撰集』不知）
（時期を知らずに降った
雪かと思えるほど、垣根
も撓むほどに咲いている
卯の花よ）
旧暦の四月は「卯月」
と呼ばれます。由来は
卯の花が咲く「卯の花月」
を略したとも、稲の苗を

植える「植月」から変化
したとも言われます。卯
の花の少し青みを帯びた
白花は、桜の春を飛び越
えて、冬の雪景色の美し
さを思い起こさせるもの
でもあるのでしょうか。
卯の花は、夏の景物と
して『万葉集』の時代か
ら親しまれてきました。

五月山
卯の花月夜
ほととぎす
聞けども飽かず
また鳴かぬかも

（五月の山の、卯の花が咲
いている月夜の晩に、時
鳥の鳴く音を聞いていて
と飽きることがない。何
度でも鳴いてほしいよ）
月光に照らされた卯の
花は、さぞかし幻想的な
姿でしょう。卯の花と取
り合われる「時鳥」は、
夏を告げる渡り鳥として

「卯月鳥」「魂迎鳥」「死
出田長」などの異名を持
ち、死出の山（冥土）を
往來する鳥とも言われま
す。ご先祖様からの手紙
を携えて、飛び来たった
のでしょいか。月光によつ
て照らされる卯の花が
まるで道案内をしている
かのようです。
ところで「卯月八日」
という年中行事をご存じ
でしょうか。この日（四
月八日）、全国の寺々で
はお釈迦様の誕生を祝う
「降誕会」（仏生会）が
営まれますが、それとは
別に、日本では古くから
旧暦四月八日（今年には
五月三日）に、野山に草
花を摘みに行く風習があ
りました。

「卯月八日」に山に分
け入り、卯の花や躑躅
藤や石楠花などを採って
里を持ち帰ります。そし
て、花を竹竿の先に束ね
ると庭先に高く掲げまし
た。それは、山の神が田
の神となって里に降り
立つたことを意味し、神
の守護によって、田植え



五月には多くの草花が咲き揃う

を始める時期でもあった
のです。
また、神様はご先祖様
の霊（祖霊）とも考えら
れていたことから、お墓
参りをした花をお供えす
る地方もありました。や
がて「卯月八日」の風習
は仏教と結びつき、花を
飾ってお祝いの「降誕
会」が「花祭」と呼ばれ
るようになったそうであ
す（和歌森太郎「春山
入り」等参照）。

このように、この季節
の草花には、ご先祖様が
宿つていると考えられて
いました。この五月は
お盆やお彼岸のように神
仏をお迎えし、身を浄め
自然の恵みに感謝する折
節でもあるのです。
ちなみに、「花祭」で
は可愛らしい誕生仏に甘
茶を注ぎますが、参拝者
はその甘茶を持ち帰り、
それで墨を擦って、
千早振る
卯月八日は
吉日よ
紙下虫を
成敗ぞする

という和歌を書くことも
行われていました。どう
やら、これを書いた紙を
トイレなどに逆さに貼っ
ておくと、害虫が来なく
なるという虫除けの俗信
のようです。「卯月八日」
は神様をお迎える良い
日柄なので、いつも悪さ
をしている「紙下虫」を
懲らしめよう」というの
でしょう。「卯月」に「憂
し」（嫌だ）、「紙」に「神
様」の意が掛けられてい
るかもしれませんが、いず
れにしても昔の人々の洒
落が効いています。

折り折りの記 (93)

波多野 重雄

隠し湯の垂桜や鳶魚の碑

武田信玄の戦国秘湯「隠し湯」下部温泉に、古武士
の傍の小説家海音寺潮五郎氏による碑面撰文揮毫の
「三田村鳶魚翁終焉之地」の記念碑が建立されている。
翁は八王子千人同心の末裔。若き日の、三多摩自由
民権運動の壮士。坪内逍遙は氏の諒博な知識に早稲
田大学顧問とし、日本随一の江戸文学者である。逍遙
を八王子に招聘、車人形の実演と普及に尽力した。
翁は戦時下疎開で奇寓病没。記念碑の垂桜に番の
鶯が日がら花に影を落とす遊んでいる。垂桜が夕暮
れそよぐ景は、江戸をこよなく愛した翁を敬慕する
ようだ。

(高尾山健康登山の会長)

百観音霊場巡礼 (23)

厚木市 荒井 一雄

夏遊海上山

礼拝観音像
読誦観音經
僧勸承朱印
我求尊朱印

この寺の
僧の勤めし御朱印帳
厚かりしこと類希なり
夏、海上山（千葉寺）に遊ぶ
礼拝す、十一面観音像を…
読誦す、観音經（妙法蓮華經觀世
音菩薩普門品第二十五）を…
僧は勤む、御朱印を承くるを…
我は求む、尊き御朱印を…

「卯の花」をめぐっては
次のような面白話もあり
ます。

室町時代末期のお話。
宗祇（一四二一～一五〇
二）という有名な連歌
師がいました。ある時、
京都嵯峨野の小さな草
庵に立ち寄りつてみると
庭に見事な卯の花が咲き
誇っていました。

その草庵には、鼻が高
い僧侶が住んでいました。
宗祇はその様子を見ると、
一句を短冊に書き記し、
卯の花の枝に結びつけま
した。

さかばうのはなに
きてなげほととぎす
さて、宗祇が帰ろう
とすると、僧侶が「この
句を聞かせてください」と
と言って呼び止めます。
そこで宗祇が、
咲かば卯の
花に来て鳴け

時鳥
と読み上げると、僧侶
は安心した表情を見せ
ました。理由を尋ねると
「私の鼻は高いので、
嵯峨坊の

鼻に来て鳴け
時鳥
と聞こえて、気に入らな
く思ったのです」と話す
のでした。

（塵塚物語）
僧侶は、日頃から自
分の容姿を気にしていた
のでしよう。せつかくの
卯の花の匂も、違って聞
こえてしまったようです。
あるいは宗祇は、実は僧
侶が思っていたように詠
んだのかも知れません。
戯れが過ぎたと思つて、

慌てて言い訳の句を詠ん
で逃げたとも考えられる
でしょう。
うむ卯の花の
雪仏
（松永貞徳）
人は考えようによつて、
さまざまな見方ができる
ものです。「卯の花月夜」
に照らされる初夏の花は、
もしかすると雪の下に佇
む野辺のお地藏様かもし
れません。

（栃木北部教区普濟寺）
去る四月十二日の早朝、
修験灌頂式が厳修されま
した。
今回灌頂を授かったのは
齊藤源峰さん（写真右）
と渡邊隆道さん（写真左）
のお二人です。
お二人は修験行者とし
ての行を修め、正式な高
尾山修験道の先達となら
れました。
今後は後進の行者への
指導役として、一層の活
躍が期待されます。

修験灌頂式厳修



新たに高尾山修験道の先達となられました